

令和3年度

学校評価報告書



付帯資料：①令和3年度 県学力診断テスト経年変化表

②令和3年度 保健管理概要

【学校保健委員会より】

銚田市立旭北小学校

令和3年度 学校評価報告書

銚田市立旭北小学校長 白田 美佐代

1 学校教育目標

- 豊かに学び未来を拓く児童の育成

2 組織目標

- (1) 豊かに学び，未来を拓く児童の育成
- (2) チーム旭北を生かした組織的な教育活動の推進

3 学校評価（教職員，児童，保護者）

(1) 実施期日等

1回目 7月15日～31日

2回目 12月20日～31日

※ 今年度より，保護者と教職員は，メール配信でアンケートを実施

※ 児童は，タブレットを使って実施

(2) 評価結果 資料1・2・3 学校評価結果参照

(3) 結果の公表

- ① 地域への公表 学校評議員会（紙面決議）で配付
- ② 地域・保護者への公表 学校HPにて公開

(4) 校内学校評価検討会の実施

- ・実施期日 令和4年2月28日（月）

(5) 全体考察

- ・昨年度までは，30項目で実施していたが，メール配信でアンケート実施し，類似した項目を統一し項目数を減らした。
- ・評価項目は，教職員18項目，児童16項目，保護者17項目で，3者に関連した内容で設定した。

(6) アンケートの回答

4段階で回答

- A「そう思う」
- B「どちらかといえばそう思う」
- C「どちらかというともう思わない」
- D「Dそう思わない」

(7) 項目ごとの考察と改善策 (○考察, □改善策)

① 教師が児童の良さや頑張りを認めているか

- 児童と教師の数値は, A83.3 + B16.7 で, 100 %となり, 一致した。児童と教師の関係は良好と言える。保護者 A64.3 %と児童・教師の数値に比べると低かったが, C・D の回答はなかった。
- 教師は, 電話や連絡帳などを通じて, 児童の頑張りを伝える機会を増やす。

② 児童が学校は楽しいと感じているか

- 児童と教師の A の数値は, 児童 86.4 %教師 85.7 %とほぼ一致した。しかし, 保護者は A が 76.8 %, C が 5.3 %であった。また, 児童に D が 3 %いた。1 回目も C1.7 %, D1.3 %であった。
- 少数だが, C と D と回答した児童と保護者がいたので, 特定できれば個別に対応し, 学校生活の不満の解消に努める。児童の学習の躓き, 活躍する場の設定など一人一人の能力に応じた対応をする。

③ 授業はよく分かるか

- A は児童が 78.8 %, 教師が 57.1 %, 保護者が 53.9 %で, 児童の数値が高い。C は児童と保護者で 3 %の回答があった。
- 教師への設問は, 「よく分かる授業を心がけているか」である。「児童がよく分かる授業ができたか」ではなく, 「心がけたか」であるので 100 %を目指したい。今年度は, ICT を活用した学習が本格化した。ITC 機器を思うように有効活用できないことや新型コロナウイルス感染症対策で対話を重視した授業ができなかったこと等が影響したと考える。

④ 表現力が高まっているか

- A は児童 59.1 %, 教師 42.9%, 保護者 33.9 %で, 児童と保護者は, C と D の回答も少数あった。A + B は, 教師が 100%, 児童 95.5%, 保護者が 89.8%と低くはない。
- 教師への設問は「考えを伝え合う力を伸ばす授業を行っているか」であるので, ③同様 100 %を目指したい。伝え合う活動の時間の取り方や具体的な活動について共通理解を図る研修が必要である。

⑤ 話を良く聞くことができるか

- A は児童 86.4 %, 保護者 48.2 %, 教師 28.6 %と数値に開きがある。A + B でも児童 98.5 %, 保護者 96.4 %, 教師 85.7%で教師の数値が低い。
- この設問では, 児童は自分自身のこと, 保護者は自分の子どもを主に考えて回答するが, 教師は, 学級の全体指導だけでなく, 児童の発言など様々な場面を想定するので数値に幅が出と考えられる。しかし, どの場面においても「人の話を聞こうとする態度を身に付けさせたい」, 教師自らも手本となって見せるべきである。

⑥ 進んで学習に取り組んでいるか

- 教師 A14.3%, B85.7%, 児童 A80.3%, B18.2%, 保護者 A48.2%, B44.6 %であった。

教師には、「主体的に学習に取り組む指導法の工夫をしているか」と自分のことを評価する設問となったが、児童と保護者は、授業だけでなく家庭での学習についても評価の基準としていると考える。研修において『主体的に学習に励む児童の育成』を目指す。

⑦ 読書に取り組んでいるか

教師 $A57.1\% + B42.9 = 100\%$ ，児童 $A68.2 + 24.2\% = 92.4\%$ ，保護者 $A48.2 + 35.7 = 83.9\%$ であった。

$A + B$ の数値を見ると概ね好評価であったが、保護者の数値が低いのは、家庭での読書の習慣化がされていないためと考える。テレビの視聴やゲームをする時間を減らし、読書の習慣を付けるために、学校図書貸し出しや生活習慣の見直しに具体的な策を考える。

⑧ 学級や縦割り班での活動を楽しんでいるか

A が三者とも7割，保護者が $C1.8\%$ ，児童 $D3.1\%$ であった。

児童の $D3.1\%$ は設問2「学校が楽しい」の D の数値を一致している。個別の教育相談などで確認し、不安や不満の内容を職員で共通理解をして改善を図る。

⑨ 道徳の授業で学んだことを生活で生かしているか

A は教師 71.4% ，児童 72.7% とほぼ一致した。保護者は $A48.2\%$ だが $A + B$ は、 94.6% と高い数値であった。

教員は、前期 25% から後期 71.4% と数値が一気に上昇した。これは、道徳の公開授業に向けて職員が一丸となって研究した成果であると考えられる。

⑩ 教師は相談しやすいか

A は教師 100% ，児童 81.8% ，保護者 51.8% であった。保護者は $C8.9\%$ ， $D18.8\%$ ，児童 $C1.5\%$ と小数だが教師が親身に対応していないと感じている。

教師は全員が相談に親身に対応していると回答したが、保護者の約1割は「相談しづらい、親身に対応していない」と感じているので、そのずれをアンケートの記述を元に、対応できることは改善し、実現不可能な内容については、説明をして理解を得る。

⑪ 自分に自信を持っているか

A は教師 85.7% ，児童 51.5% ，保護者 35.7% であった。 $C + D$ は、教師 0% ，児童 $4.5 + 7.6 = 12.1\%$ ，保護者 $7.1 + 1.8 = 8.9\%$ と自己有用感が低いとまでは言えない。

児童一人が活躍できる場や機会を設けて、賞賛や励ましを意識して指導に励む。

⑫ 学校は安心して生活できるか

A は児童が 86.4% ，教師が 85.5% でほぼ一致した。保護者は $A55.4\%$ ， $B39.3\%$ ， $C5.3\%$ であった。

安全・安心には、施設管理、交通安全、健康、生徒指導など様々な視点がある。具体的内容には、それぞれ対策を立て、共通理解して解決していく。

- ⑬ 進んで遊んだり運動したりして体力の向上を図っているか
- Aは、児童 80.3%、保護者 60.7%、教師 42.9%であった。また、児童 C4.5 %、保護者 C1.8 %との回答もあり、一部の運動嫌いの存在が認められる。
 - 外遊びをしない児童や運動嫌いの児童は特定されている。休み時間外で遊ばせるための手立てや個別の健康指導を行う。
- ⑭ 児童の安全確保に努めているか
- A 教師 100%、児童 92.4 %、保護者 60.7 %、保護者の C5.7%であった。
 - 保護者アンケートで、学校東側の横断歩道に教師が立っていないことに不満を持つ保護者の記述があったのでアンケート以降は登校時に見守ることとした。具体的な内容で、改善可能な内容については努力する。
- ⑮ 生活習慣の向上に努めているか
- A+Bは教師 $71.4 + 28.6 = 100 \%$ 、保護者 $50+50 = 100 \%$ 、児童 $59.1+37.9 = 97 \%$ であった。
 - 児童の C と D が 1 名ずついるので個別の指導と保護者の協力を得て改善を図る。
- ⑯ 地域や家庭との連携と子ども会への積極的な参加
- 教師 A57.1 %、42.9 %、保護者 A42.9%、B50%、C7.1 %、児童 A72.7%、B13.6%、C9.1 %、D4.6%であった。
 - 新型コロナウイルス感染拡大防止のため様々な行事が中止、縮小されたので数値が低い。その中でも、クラシックコンサートとバレエ公演、オリンピック・パラリンピック推進事業、おもしろ理科先生講師 3 名来校など、様々な出前授業や企業のオンラインでの授業に参加できたことは児童にとって有意義な活動となった。今後もコロナ禍での体験活動を模索する。
- ⑰ 学級や児童の様子発信
- 教師は A57.1 %、B42.9 %、保護者 A69.6 %、B25 %、C5.4 %であった。
 - 学校通信は毎月 1 回、ホームページの更新は、ほぼ毎日行っている。
- ⑱ 勤務時間を意識した仕事の効率化
- 教師 A57.1 %、B42.9 %であった。
 - 月ごとの超過勤務時間 4 5 時間を超えることは年間を通して少ない。年度始め年度終わりの超過勤務が増えない手立てを考える。